



清新二中だより

本校教育目標

- 1 豊かな心で、互いに敬愛できる人（敬愛）
- 2 進んで学び、深く考える人（知性）
- 3 健康で明るく、自ら鍛える人（健康）
- 4 責任を重んじ、勤労を尊ぶ人（責任）
- 5 礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）

修学旅行 — 自分で考え 切り拓く —

校長 白石 亨



そのお寺に着くと、青空が見えていた。

奈良の古刹 薬師寺の山門をくぐると威風堂々とした千三百年の歴史をもつ東塔が高く空にそびえ立ち、雲間を割り裂いて青空を広げているように見えた。

このことが何よりも嬉しかった。東京を出発する前夜の天気予報では、修学旅行の初日・2日目ともに関西地方は大雨が予想されていたからだ。日本列島の南海上には台風1号が発生し、その影響で前線が発達して警報級の大雨が降ることが心配されていた。だからこそ予報に反し、初日の薬師寺でのお説教の拝聴、東大寺大仏の拝観、奈良公園での鹿との触れ合い等が、晴れ間の下で実施できて有難かった。

だが、修学旅行2日目は大雨となった。

日本が誇る気象庁は2日間連続で天気予報を外すことはなかった。朝食を終えるとさっそく班行動が開始された。旅に出て雨に降られるときほど辛いものはない。雨がうらめしい。でも出発するしかない。多くの班が強い雨が降る中、JR奈良駅まで歩き、そこから電車に乗って京都方面を目指した。

お昼を過ぎると雨足はさらに強まった。

学年主任の先生と連絡を取り合い、当初の予定は午後5時近くの宿入りだったが、強い雨風に配慮して、お昼を食べ終えた後、午後2時には宿舎に入れるように段取りを整え、その旨を生徒に連絡した。各班に1台のスマホを配備していたが、このときばかりは連絡がすぐに行き渡る文明の機器に感謝した。

2時を過ぎると各班が続々と宿に到着する。皆、雨でびしょびしょだ。中には到着するや否やスカートの裾を握って水をしぼる女子も見られた。また雨の中、特に難儀だったのは靴が濡れたことだと思われた。旅館に到着してもすぐには部屋に上がれない。玄関で濡れた靴、靴下を脱いで、宿が用意してくれていたタオルで足を拭いてからでないと上がれなかった。それだけ靴は水に侵食されていたのだ。

早々に宿に到着していた実行委員は、新聞紙をギュッとしぼり丸めて、濡れた靴に詰め込んでくれた。靴の湿気をとるための新聞紙だ。汚れた他人様の靴を触ることはなかなか勇気がいる。ためらってしまう場合も多い。でも嫌な顔をせず、ひたすら仲間のために作業を続けてくれた。自主的に黙々と作業を行う眼差しがキリリと真剣だった。見ていて胸が温かくなり、今でもこのことが強く心に残っている。

2日目の班行動は苦勞の連続だったと思う。だが、臨機応変に班の予定を変更し、京都タワーに雨宿りも兼ねて行くなどの工夫する班もみられた。どの班も、自分たちで考え、自分たちで判断し、自分たちで行動してくれたのだ。このことがとても頼もしく、また嬉しく感じられた。さすがは3年生だ。

このように、修学旅行のメインは2日目の班行動にあったが、雨に泣かされた。でもこのような場面は何も修学旅行に限ったことではないように思える。この世の中はいつも順風満帆とは限らない。生きていく上では、避けられない困難な場面に直面することはままあることだ。そのようなときこそ、自分の置かれた環境を嘆くのではなく、あるがままの現状を真摯に受け止め、その中で最善を尽くすことが何よりも大切だと思う。他人任せにせず、当事者意識をもって、常に自分で道を切り拓くことが肝心だ。

仲間と共にやり遂げた修学旅行。一人ひとりが自分の成長を実感できた旅であったと確信している。